第７回 にしお本まつり

H24.10.27（土）・28（日）

にしお本まつり NISHIO BOOK FESTIVAL

読書の秋がやってきました。恒例の「にしお本まつり」、今年も開催します。西尾を「本の町」として盛り上げよう！と、文庫と市立図書館、そして市民ボランティアの皆さんの協力で行う“本”の祭典、今回も多彩な催しが目白押しです。ぜひ遊びにいらしてください。

主な催し

- ●女流俳人　黛まどか氏講演会
  「詩歌に見る日本人のユーモアと美徳」　27日(土)
- ●江戸時代料理教室　28日(日)
- ●岩瀬文庫本を［ちょっとだけ専門的に］読む
  ～古典文学ゼミナール入門④～　28日(日)
- ●<国登録有形文化財>岩瀬文庫旧書庫内部特別公開
  27日(土)・28日(日)
- ●岩瀬文庫ミニミニ閲覧室
  27日(土)・28日(日)
- ●にしおの古本市　27日(土)・28日(日)

■詳しい時間や場所、参加方法はにしお本まつりHPまたはチラシをご覧ください。

岩瀬文庫旧書庫

黛まどか氏

江戸時代料理教室

古典文学ゼミナール入門

にしおの古本市

ミニミニ閲覧室

くずし字を読んでみよう　その2

くずし字にトライするにあたり、手始めにどんなものを読んでみたらよいでしょう？初心者の場合は、読めなかった字をすぐ確認できる“解答”があるものをおススメします。書店にゆくと、楽しく学べる工夫の凝らされたくずし字習得の参考書がいろいろ並んでいますので、こういう本から始めるのもいいですね。たくさん買う必要はありません。中身を見比べて好みに合いそうなものを選び、まずは１冊おしまいまでじっくりと取り組みましょう。

江戸時代の文学作品などを読むのに欠かせない“変体仮名”の習得には「小倉百人一首」がおススメです。江戸時代にも、教養や手習いの教科書としてよく使われていました。書かれているのは皆さんよくご存知の歌ばかりですので、もしも難しい形の字に出くわしても何と読むべき字なのかすぐわかりますね。もっと長い文章を読みたい方は、例えば「枕草子」や「徒然草」、「奥の細道」などなど、有名どころの古典文学を選ぶのもよいでしょう。これらは活字印刷本が多数出版さており、読めなかった時の“解答”として使えます。くずし字で書かれた古典文学は、当文庫のように古典籍を所蔵している博物館や文書館、図書館などのコピーサービスで入手できます。

また、１枚ものの古文書でしたら、博物館などの展示図録をテキストにするのも手です。近年は印刷がとてもキレイで掲載写真でもじゅうぶん文字が読めますし、図録に掲載された古文書は翻刻文が載っていることが多いので、答え合わせも可能です。

しかしいずれのテキストを選んだとしても、最初に答えを見てはいけませんよ！　（つづく）

【『百人一首』かなのヴァリエーション】
どれも清少納言の「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも　よに逢坂の関はゆるさじ」の歌です。本によって異なるくずし字を使っており、かなの習得にはもってこいです。

企画展

耕す －岩瀬文庫の農書の世界－

平成24年9月8日（土）～11月11日（日）

■開館時間　午前9時～午後5時
■休館日　月曜日・9月18日（火）・10月9日（火）

入場無料

古来より日本人は稲作を始めとする農業を盛んに行ってきました。律令制以降、稲は税を納めるため、そのほかには特産物などを献上品として納めるなど農作物の占める重要性、また、収益を得るため、自ら生きていくためにはかつては日本で一番多数を占めたであろう農民の役割は大きなものがあったと思います。今回の展示では、江戸時代を中心に農業に関する書、「農書」を取り上げ、かつての農業に向かう姿勢や時には様々な知恵、農作業風景などについて取り上げます。

江戸時代の農書

農業を行うにあたってより生産性を高めるため、あるいは農具や農業の技術向上のため刊行された農書を紹介します。

江戸時代の三大農学者と呼ばれる宮崎安貞による『農業全書』、著者不明ながらその内容から三河遠江付近の農業及びその関連事項について仔細に記している『百姓伝記』、加賀地方の農業について土屋又三郎によって仔細に記された『耕稼春秋』などを紹介します。

農業全書

百姓伝記

農業を広める

江戸時代から明治時代にかけて、農業の普及のために多くの著書を記した農学者を紹介します。

一人は、大蔵永常です。永常は、『日用助食　竈の賑わい』など、飢饉時の生活について記した書物でも知られています。稲作以外の作物の栽培をすすめています。ここでは農学者としての歩みを著作の流れで見てみます。櫨の木の栽培法を記した『製蠟録』、『農家益』、葛の栽培について記した『製葛録』、永常農学の集大成とも言える『広益国産考』などを紹介します。

もう一人は、岡崎出身で、農商務省に勤め、内外の農書の収集に努めた織田完之です。明治時代になり欧米からの技術を多く伝える中、日本古来の農法の有益性を評価した『農家矩』、農商務省でまとめた『大日本農史』を紹介します。

耕す道具

耕作を行うための農具について詳しく知らせるため、挿絵入りで、その法量などについても細かく記されたものがあります。大蔵永常による『農具便利論』、明治時代に農商務省に提出したものの写しと思われる『農具図』などを紹介します。

様々な作物

稲作以外にも、実用のため様々な作物が栽培されていました。そのなかでも茶、葛などについての栽培についての資料を中心に『製茶図解』『日本山海名産図会』など紹介します。

農具便利論

広益国産考

関連行事
◇ギャラリートーク
9月15日（土）
10月13日（土）
いずれも午後1時30分より

蔵書紹介

『耕稼春秋』（こうかしゅんじゅう）

（46－23）五冊　（表紙写真）

加賀国石川郡の十村をつとめていた土屋又三郎が『農業全書』の刊行に刺激され、宝永4年（1707）自ら加賀地方の農業について論じた書です。十村とは、加賀藩などで行われていた制度で地方の有力な農民を任命し、農村の管理監督を行わせた制度です。

全5冊の始めの2冊には正月から月を追っての農作業の挿絵で構成されています。続く3冊目にはその流れが文章で記載されています。正月が終ると早速準備に取り掛かり、稲作をはじめ、豆や雑穀、麻や野菜など様々な作物の栽培を計画的に行っていく様子を紹介しています。そこにはこの加賀地方では江戸時代、既に農業の多角化を行っていた状況を見ることができます。そのほか、耕作に必要な水利、肥料のことや、耕地の形状、使用する農具のことなども記載しています。この又三郎は事件に巻き込まれ四十九歳のとき十村の地位も失い、剃髪し、直心、野衲と号します。そんな失意の中でこれまでの研究成果をまとめるような形で『耕稼春秋』を作ります。そこには又三郎の農業に賭ける心意気を感じることのできるものとなっています。

おいしいお米をつくるため、代掻きや田植えにはげむ農民の姿が描かれています。

［表紙写真解説］
秋の稲刈りの様子です。秋は夜が長くなっています。月明かりの下稲刈りに励む様子が描かれます。